

令和 5 年度

1 自己評価及び外部評価結果

事業所名 : グループホームまぶる「いろは館」

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0393000146		
法人名	有限会社ヘルパーはうす		
事業所名	グループホームまぶる「いろは館」		
所在地	〒028-1352 岩手県下閉伊郡山田町飯岡6-14-1		
自己評価作成日	令和5年10月6日	評価結果市町村受理日	令和5年12月14日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

入所者一人ひとりの思いをくみ取り、「豊かな いろはで(知識で) 一笑懸命(何があっても負けずに笑って頑張ろう)まぶります(守ります)」を理念にかかげ、共に笑いある生活を心掛けて支援しています。また、旬の食材を取り入れた食事の提供で四季を感じ、コロナウイルス感染防止策により、外出の制限もあるが、入所者と職員との手作りの装飾や年間行事にも力を入れて取り組み楽しく生活しています。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先 https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

当事業所は、山田駅から車で5分ほど山手の住宅地に立地あり、テラスからは町並みや山田湾が眺められる。職員参加で新しい理念を見直し、今年4月からはこれまでの理念に「一笑懸命」を加え、利用者の笑顔が絶えないケアを実践するよう努力を重ねている。また、利用者ごとに異なる思いや意向の把握に特に力を注ぎ、アンケートやモニタリングの結果を受け、表情や仕草などから聞き出し、読み取る取り組みを進めている。地域との交流も復活してきており、地域での高齢者サロンに利用者が参加したり、秋祭りの神楽団体が来所してくれたり、利用者の楽しみも増えてきている。身体拘束の防止のため、スピーチロック防止のセルフチェックシートを活用して、職員自身の気づきを促す取り組みも積極的に行っている。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通2丁目4番16号
訪問調査日	令和5年10月26日

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外に行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホームまぶる「いろは館」

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	開設当時の理念を見直し、再策定し、毎朝の申し送り時に職員唱和し、入所者の支援に心掛けている。	開設以来の理念を、今年3月に職員全員が参加して見直しのための話し合いを行い、4月から新たに「一笑懸命」を加えたものに変更した。職員は、笑顔を絶やさず利用者に寄り添い、毎日、利用者の笑顔が見られるケアを目指している。理念をホールに掲示するとともに、毎朝の申し送り時には唱和して浸透に努めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	感染防止策にて、交流の機会は少ないが、地域の集まりに参加したり、地元のお祭りで慰問して頂いたり、運営推進会議にも地域の方々に参加して頂き協力を得ている。	地域の民生委員が主催する高齢者サロンに、一部の利用者も参加して交流を深めている。また、秋になって地域の八幡神楽の団体が事業所で踊りを披露してくれるなど、地域との交流が復活してきている。4人の中学生が福祉体験活動として来所してくれた。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	中学生の福祉体験や地元の認知症セミナー開催時に、作業協力を行い理解の場を得ている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に1回開催し、入所者の身体状況や施設の取り組み状況を報告し、幅広い意見や助言を頂き、サービス向上に努めている。	地域包括支援センター職員や民生委員、自治会副会長、事業所地権者、近傍のグループホーム職員、入居者家族を委員とした、バランスのよい構成となっている。今年5月から集合開催を再開し、委員から書面開催と比べて評価する意見や運営に関連する質問・意見など、様々な発言があり、有意義な会議となっている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議に参加して頂いたり、ランチミーティングを開催し、事業所の現状を理解して頂き、助言や情報等のやり取りが出来る関係性が出来ている。	運営推進会議には地域包括支援センター職員が参加し、事業所の運営状況について良く理解している。町の担当課とはメールなどでのやり取りも多く、相互の意思疎通が図られている。また、町主催の地域ケア会議には事業所からも参加し関係機関等との連携を深めている。	

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホームまぶる「いろは館」

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	コロナ感染防止策として県内の感染状況を勘案しながら、玄関の施錠は適宜行っている。また身体拘束については施設内の勉強会を始め、職員一人ひとりがケアに対して意識を持ち取り組んでいる。	2ヵ月毎に運営推進会議の中で身体拘束廃止の委員会を開催している。職員への研修会を3ヵ月毎に行っているほか、「拘束に係るセルフチェックシート」での自己点検にも取り組んでいる。スピーチロックの言動がある場合には、管理者が場を改めて注意し、指導している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	施設内での身体拘束を含めた勉強会やチェックリストを用いてケアの見直し、気づきや意識付けを出来るよう取り組んでいる。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度を利用している入所者もあり、学べる機会もある。必要時には関係者と連絡を取り合い支援をしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には、入所者、家族と話し合いを行っている。また、必要書類の説明を行い、理解と納得を得ている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	入所者には日々の会話やモニタリング・アンケートで意見や要望を取り入れている。家族には面会時や電話連絡、アンケートで意見や要望・意向を確認し、ミーティングや申し送りで伝え、ケアプランにも反映させている。	家族には、2ヵ月毎に広報誌を送付し生活の様子をお報せし、面会や通院同行で来所の際に話を伺うようにしている。また、家族アンケートを実施し、半数位の家族から、利用料金やケアの内容などへの要望を得ている。利用者からは外出や食べたい物の希望が多く、出来るだけ対応するよう心掛けている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	朝の申し送りやミーティングで意見交換を行った後、職員アンケートを行い、運営に反映させている。	毎月の職員会議では、利用者のケアなどに関する意見が出され、ただちに可否を判断せず、まず試してみるという姿勢で改善につなげるよう取り組んでいる。また、職員の意見を把握するために、アンケート調査も行っている。	

事業所名 : グループホームまぶる「いろは館」

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	日々の会話や身体面、個人の状況を含め、働きやすい職場環境作り、勤務の考慮、休日・有休等を与えることが出来るよう努力している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	定期的な勉強会や外部の方を招いた勉強会を行っている。また、立場や経験の段階に応じた学びの機会を得て職員のケアの向上に努めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	町内GHの運営推進会議に参加したり、感染症のBCPでは町内の同業者と感染時の協力体制を構築するための話し合いをしている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所者の調査で、本人の要望や不安ごとなど傾聴し、入所前にホームの様子を見学に来て頂いたりしている。また、安心や信頼関係が得られるよう、関係作りに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	相談時、申込時の家族等の実情や要望をもとに、施設での生活に馴染み、本人・家族が安心した生活が出来るよう対応している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談時・入所時の本人・家族の実情、心身面の状況を理解し、施設の生活に馴染み、安心した生活を送れる様、家族と連携し、共に支え合う支援が出来るよう努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	生活の中で喜怒哀楽を共にしたり、本人の個性の引き出しや得意とする事を活かし、役割作りを構築し一緒に行動することで支え合う関係作りに努めている。		

事業所名 : グループホームまぶる「いろは館」

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	可能な限り、通院時の付き添いや外出・面会を要請し、家族にも役割をお願いしている。また、面会や通院報告等で連絡を取り合い、支え合う関係作りを行っている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ感染状況を考慮し、外出・面会にも制限はあったが、休息時の面会や地域の行事に参加し、知人に会うことも出来ている。	地域の高齢者サロンに出かけることで、知人に会う機会にもなり、新たな馴染みの場所となっている。また、地元の神楽団体が来所してくれたことは、懐かしい行事を楽しむ良い機会となった。多くの利用者が2ヵ月に1度の訪問理容を楽しみにしており、新たな馴染みとなっている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	難聴の方には、職員が介入してコミュニケーションを図れる様努めている。また、入所者男性・女性のいる中で、作業や活動を通じて関りを持ち楽しく生活出来るよう対応している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退去された方でも、家族が遠方にいる方の入院中の対応や今後についての相談・助言を行い経過をフォローに努めている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	モニタリングシートやケアカンファレンスシートには思いや意向を聞き取る項目を設け、更に思いや意向を介護職が予測する項目もある。日々生活の中での会話でも意識的に思いや意向を聞き逃さないように会話し、食事やドライブ等の参考にし、直ぐに出来る事は対応するようにしている。	食べたいものや外出してみたいとの希望や思いを言葉で表せる方は4人ほどおり、可能な範囲で意向を具体化できるよう努めている。言葉で伝えることができない方には、職員からいろいろと問いかけて意向を把握し、その内容を介護計画のシートに記入し職員間で共有している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	病院からの入所には情報書類のやり取り、在宅からでも担当ケアマネより情報が提供される。また契約時点で身上書の提出を義務付けており、家族のわかる範囲ではあるが、生活歴などの情報把握ができています。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	その日の過ごし方、バイタル、食事水分の摂取、排泄の有無、変化、周辺症状の有無、変化、対応方法など記録し職員間で共有し、何があっても誰であっても対応可能な体制を確立出来るよう努めている。		

令和 5 年度

事業所名 : グループホームまぶる「いろは館」

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアカンファレンスシートやモニタリングシート内で聞き取りや介護職の意見も参考にしながら計画作成担当者が、生命維持、苦痛の軽減、実施可能、解決可能な課題を優先的にプラン作成している。初回のプランはアセスメント重視だが、二回目以降はモニタリング重視でプラン作成している。3か月ごとのモニタリングで状態変化に即した計画を作成している。	入居時の介護計画は暫定的なものとし、1～3か月経過後に、ケアマネが正式な計画案を作成して、カンファレンスでの検討を経て決定している。計画の見直しは3か月毎に行い、計画作成上重視しているモニタリングは、居室担当の職員が同じサイクルで担当し、カンファレンスで確認しあっている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個人ファイルが整備され、特に重要な出来事や通院での主治医の指示、薬剤の変更などは連絡ノートに記載されることで情報の共有がなされカンファレンスシート記入に意識され、介護支援に活かされている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人や家族の状況に応じて、これまでも事務的な事でも、しないとされる町外の通院でも、他施設への移行支援等、必要不可欠な事には支援している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	特に祭りの郷土芸能に関しては、団体の協力のもと施設敷地内まで来ていただき、感染症等気にする事もなく交流できている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	町外の通院は基本家族対応にしているが、他県在住や他市町村在住の理由を考慮し、必要に応じて町外の通院も主治医変更せず、支援継続している。また、精神科の場合は心身の状況から、町内診療に紹介できない場合もあり、個々の状況に対応している。	入居前からのかかりつけ医を受診している利用者が多く、県立山田病院や(4人)、地元のクリニック(2人)等の医療機関に定期的に通院している。多くの場合は職員が付き添っている。訪問看護サービスを利用していないため、土日や夜間の急変時などに不便を感じている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師の常駐や看護ステーションとの連携はない。必要に応じて電話連絡し指示を仰ぐようにしている。町内の医療機関とは、感染が疑われる様な時ほど電話連絡必須で診療確保している。		

事業所名 : グループホームまぶる「いろは館」

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入院時、退院時の情報提供シートを病院、施設が活用し、その都度状況に応じて電話連絡や直に伺い医療職、介護職、家族で情報交換や相談が出来るている		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	町内には二か所の医療機関があるも、どちらも訪問診療、往診には力を入れていない。その状況を理解してもらい、グループホームでの支援の限界も知ってもらい重度化や終末期の在り方について納得して頂いてる。協力医の不在により、緊急時には救急搬送しかない現状であるし、早急に搬送でいる様に入居者の状態に留意している。	看取りの対応を行っていないことを含め、重度化した場合の対応について、入居時に本人や家族に説明し、了解を得ている。看取りについては、地元で協力医師がいないために取り組める状況となっていないとしている。そのため、重度化してきた場合であっても、職員はギリギリまでケアを続けており、その後に入院して退所する方が多い。終末期ケアの職員研修を行っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	転倒骨折事故、誤嚥誤飲事故の研修会、心肺蘇生法や施設に常備しているAEDに則した訓練を、広域消防署に依頼し、職員招聘の下、実践力を身に付け、維持できるよう努めている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	町内のハザードマップには、水害、土砂、津波等、危険区域として記載はない。火災による避難訓練はもとより水害や土砂災害の想定でも避難行動の反復訓練は行っている。	ハザードマップで浸水や土砂崩れ等の指定区域の外にある高台に立地し、町の福祉避難所にも指定されている。火災想定での避難訓練を年2回、実施しているが、先日行った夜間想定訓練では、誘導した利用者が玄関ホールに滞留してしまう等の課題が見られている。	夜間の避難は職員1人の対応となり、近隣住民の支援が必要と思われる。近隣居住の運営推進委員等を含む複数の方々の協力を得て、今以上に安心して避難できる体制を作られることを期待したい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人ひとりの生活歴・性格にも考慮し、個々に合わせた(方言を交えた)会話をし、なれ合いにならないように心掛けている。月1回のミーティングで入所者の対応についても話し合っている。	利用者の尊厳を損なわないよう、声掛けは「さん」付けを基本としている。プライバシーの確保に留意し、トイレ誘導では「点検しよう」と声掛けし、失敗した場合には羞恥心に配慮して「大丈夫ですよ」と優しく話しかけ、周囲に気付かれないよう素早く対応している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日々の会話やカンファレンス・モニタリングでも本人の希望の聞き取りを行っている。また、会話や行動・表情等でも思いをくみ取り、自己決定や納得した生活が出来るよう対応している。		

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホームまぶる「いろは館」

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	日々の日課は決まっているが、離床・臥床・休息・活動と一人ひとりのペースに応じた対応を行っている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	毎朝の整容に加え、着替えや外出時の服を選んだりしている。また2ヶ月に1回理容室に来て頂き、好みの髪形に散髪して頂いている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	入所者の食べたい物を聞き取り、旬の食材を使ったり、行事食の提供を行っている。また、食材切りや盛りつけ、食器拭き等も職員と一緒にやっている。	朝夕のおかずは業者の配膳食としているが、昼食は利用者の好みや希望を考慮して、職員が調理している。女性の利用者は、調理作業の手伝いを希望する方が多く、分担して手伝ってくれている。誕生会では、その方の希望するメニューを用意し、おやつ作りではミニパフェを職員と一緒に作って楽しんでいる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一人ひとりに合わせた食事・水分形態(刻み・トロミ使用)の工夫とこまめな水分補給を行っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔内の状態を把握し、食物残渣に気を付け個々に合った口腔ケアを行っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人ひとりの排泄チェック表を用いて、パターンを把握し、声かけやトイレ誘導を行うことで、自立した排泄や失敗を減らす対応を行っている。	布パンツ使用で自立の方が5人と多く、他はリハビリパンツ使用が3人で、オムツ使用の方はいない。夜間のポータブルトイレ使用は5人となっている。、現状維持を目指し、排泄チェック表を活用して適時の声掛けと誘導を行っている。在宅時に比べて状況が改善した方もいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎朝、牛乳・飲むヨーグルトの提供や野菜を多く取り入れた食事の提供を行っている。また、毎日の体操・活動を行い、便秘予防に取り組んでいる。		

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホームまぶる「いろは館」

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	行事や通院での変更はあるが、週2~3回の入浴で一人ひとりに合わせた対応を行っている。	週に2、3回午後の時間帯の入浴を基本としている。30分以上の長風呂の方もおり、職員と1対1で会話が弾み、成育歴や日頃の不満を話されたりしており、人となりなどを把握しながら、何よりも利用者の楽しみの時間となっている。異性介助を嫌う利用者には、希望に沿って対応している。季節を感じられる菖蒲湯なども楽しんでいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	室内の温度や寝具を調整し、いつでも気持ちよく休息したり、日中の活動にも工夫をし、安心して眠れる様対応している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	通院記録や処方箋は個人のファイルに閉じて確認している。薬の変更時も職員情報共有し、状態変化に気を付けて、次回通院時報告を行い対応している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	食事準備・片付け・洗濯たたみ等の役割を持ち、縫物や本・新聞を読んだり個々の時間を過ごし、室内の装飾や行事等の手作り演出など工夫し楽しく生活できるよう支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ感染予防で外出の機会は少ないが、花見や紅葉ドライブ等で外出・外食し、何年かぶりに家族に会えた入所者もいる。	コロナ禍のために外出機会が減少していたが、少し回復しており、お花見や紅葉見物のドライブで町内の臥竜梅や船越半島などへ出かけている。また、気分転換に外気浴方々、事業所周辺の散歩やお隣りの庭に咲く花を見に行っている。高台にある事業所のテラスから臨む山田湾の眺望を楽しむ利用者も多い。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	事業所の方針として、お金を持つことはしていない。施設・家族も了承し、入所者の中でお金を所持している方もいるが、使うことはなく自分で所持し安心できている方もいる。		

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホームまぶる「いろは館」

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話はいつでも可能で、家族に電話する方もおり、居室で個別に話せる様対応している。また、家族出す年賀状にも、本人が一言添えて出したりしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節を感じられる装飾を入所者と一緒を作り、掲示している。温度・湿度計を設置し、エアコン使用や換気等で調整している。	明るい日差しが差し込み、山田湾の眺めの良いホールにはテーブルが程よく配置され、壁面には季節感ある紅葉の塗り絵作品や、利用者が描いた干支作品などが飾られている。ホール内では、利用者が職員とともに体操や歌を楽しんだりして、思い思いの時間を過ごしながらくつろいでいる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	テーブル席・ソファ席と自由に座れるが、折り合いが悪かったり、同じ場所を好む方が多い、作業や活動等で移動する事もあるが、トラブルにならないよう気を付けている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人の使い慣れた物・馴染みの物を持ち込み可能となっている。家族写真・TV・本人制作の作品などで居心地よく過ごせるよう工夫している。	居室にはベッドとクローゼット、筆筒、整理棚が備え付けられており、室温はエアコンで適温に保たれている。利用者は、テレビや家族写真などを持ち込み、壁面にイベント時の写真や自分の作品などを飾り、居心地よく過ごされている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	施設内バリアフリーで部屋・トイレ・浴室等わかりやすく表示したり、照明の工夫や手摺りの設置をし、安全な環境作りに工夫している。		